

入 選

小さな命

一年 齋藤優真

ぼくの弟が最近ハムスターを飼い始めた。弟はそのハムスターに名前をつけた。ハムスという名前だ。はじめは、どう触っていいかわからず、少し緊張しながら弟とお世話をした。事前にハムスターの本を読んでおいたおかげで、心の準備はできていたつもりだったが、いざ目の前になると、どうすればいいかわからなくなってしまった。それから約三カ月。今では緊張が解けてよく一緒に遊べるようになり、お世話も慣れてきた。ぼくはハムスがかわいすぎて家族がやらないトイレの掃除も進んでやるようになってきた。ハムスも落ち着いてきて、よく仰向けでねるようになった。そのねぞうにぼくはすごく癒されて幸せだ。そんなハムスはもう家族の一員になっている。

この夏休みに事件が起きた。その事件というのは、友達の家の犬が逃げてしまったのだ。その犬は、ぼくが友達の家に遊びに行くと、よく一緒に遊んでいる柴犬のおばあちゃんだ。その犬がある日の夕方になくなってしまったと連絡があった。ぼくは、それを聞いて居ても立ってもいられずに気が付くと自転車のペダルをこいでいた。こいでいる最中はずっと、犬がどこに行っただのかなど考えていた。最悪の事態にならないでと願っていた。結局この日は、見つからなかった。ぼくはその日の夜は、ずっと

と犬の事を考えていた。もし、これがハムスターだったらと考えたら心がドキドキして眠れなくなってしまった。翌朝早くに連絡が来た。犬が川の橋の下にびしょびしょな状態で居たらしいのだ。ぼくはこの報告がとても嬉しかった。それと同時に友達の気持ちに想像できた。きっと見つかって安心して涙が出たことだろう。

ぼくは、この夏の経験からたった一つの命でも、みんなが心配したり大切に思うことが重要な事で、すべての命に関係する事だと知った。動物の種類や大きさ、飼っているかどうか、動物なのか人間なのかに関わらずにすべての命を大切にして、共に生きていきたいと改めて実感した。まずは、飼っているハムスを大切にしてきちんとお世話して、最後まで見届けることがぼくが今できる第一歩だと思う。